静かに暮らさせてください（願望）

ピチョンプスッ！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイスクールＤ×Ｄの貞操観念逆転物。

転生した田中太郎は今日も周りの目線に耐えながら相棒の神器と共に生き抜く。そんなお話です。

目次

この世界の異常性 ―――― 1
希少だからって、調子には乗らない。 ―――― 6
主要キャラは大抵何かしらの過去がある模様。 ―――― 15

この世界の異常性

『ゴメンねゴメンね、ちょっとした不具合で寿命前に君を殺しちゃった♪　お詫びにちょっとした能力をあげて転生させるから許してチョンマゲ♪　あ、転生する世界はランダムだから頑張ってね～！』

『……は？　いや、ちょっと待ああああああああ――――――――ッ!!?

（没シュート）』

▼

――――――ヒソヒソ、ヒソヒソ

俺を除いた教室の全員が、加えて廊下の者までが俺を見てヒソヒソ話を始める。

当たり前だが耐え難い。この世界に生まれ落ちて早１８年、もはや日常茶判事で行われるコレにはもう飽き飽きだ。それに何故こんな時に限って席が教室のど真ん中なんだよ、悪意あんだろ。

と、内心グチグチ言うが、いちいち反応するのも逆効果なので手元のラノベに目を向ける。

『ん～、相変わらずモテモテだね、ますたぁは』

（止めてくれ）

ふんわり口調で手の甲から俺の脳内に話しかけるはドラゴンのクリューヌ。淡い碧の滑らかな籠手状の【神器（セイドリック・ギア）】で俺に取り憑いており、こういう公共の場ではクリューヌの幻術で普通の手に誤認させているのだとか。

その口調と名前から連想するように、所謂ゆるふわ系の彼はこういう耐え難い空間を耐えきるのに実に有難い。どれくらいかというと、彼が居なければ何か精神疾患を抱えていたのでは無いかと思うほどに。

『でもでもぉ、実際そういう目で見られているわけじゃん？　お姉様系からロリ系まで、選り取り見取りじゃん？』

（分かってる、分かっているんだよ、いくら恋沙汰無しの俺でもこれは好意の目線だってことが……。それでも実感湧かねえし、むしろ裏があるんじゃないかって恐ろしいわ！）

そう、俺の見た目は神様の好意かアニメ仕様なのかは知らないが、前世よりだいぶマシなイケメンになっていた。けれどいきなりイケメンになっても実感が湧かないしむしろ戸惑うのが普通である。

そしてこの世界でイケメンは致命的に厄介ごとに巻き込まれるのでギャルゲー主人公よろしく前髪を目元隠すほどの長さにしている。その結果、普段は陰キャだが目元の髪を退かせばあらイケメン……という夢仕様となったのだ。無論誰にも明かしていないが……。

だがそんな見た目でも何故クリューヌからそういう事を言われるか――――――それは俺が男性だからだ。

まさか夢にも思わないだろう、男が希少な『ハイスクールD×D』に転生するなんて。

そりゃあね、俺だって男だから最初は喜んだよ、ハーレムヤッホイって感じで。でもよくよく考えるとパワーインフレ激しいこの世界でどうやってハーレム築けと？　下手したら即アボンなこの世界に安寧を求めるならハーレムはダメだ。

じゃあ原作に関わらず慎ましく暮らそうとするが、そうは行かなかった。外に出ればハァハァ言われ、暑いと半袖になれば痴女ならぬ痴漢と間違われる。原作の舞台である駒王町から離れようとしたが、神の悪戯なのか事あるごとに修正力が働き離れられていない。

具体的には外部へ発つ目的で乗ろうとする交通機関が謎の事故で長期の運転見合わせになるとか。事あるごとに他人に被害を被らせるのは気が引けた。

この駒王学園に入学したのだって俺の意思では無い。

男女共学化のテストケースとして学園に通うだけでお金が振り込まれるという画期的な説明に前世の考えの俺は有無を言わさず契約書にサインした。後ほど確認すれば、それは駒王学園ではないか。

ちゃんと確認すれば避けれた原作舞台、きっとあの時は修正力で思考低下していたに違いない！（責任転嫁）
そのお陰で後輩にほんの数人男性がいる。……一部からは「お兄様」と図太い声で尊敬されているようだがな！
――――――キーンコーンカーンコーン。
始業ベルを聞き流しながら、再度この世界について瞑目する。
男尊女卑、激しいパワーインフレ、この強い個性がある世界で生き残るためには、やはり慎ましく山奥などの閉鎖的な生活が好ましいのだろうか。
痴漢ならぬ痴女、レディファーストならぬメンズファースト、グラビアの表紙がムキムキの男性が飾るこの世界。
加えて本来男の羨望であるハーレムを題材にした『ハイスクールD×D』の男女の価値観の逆転。
（ほんっと、意味分からんなぁ……）
田中太郎、駒王学園高等部3年生。未だにこの世界に慣れることはない。

▼

SAN値ゴリゴリ削れた俺にとって、昼休みは唯一の癒しとも言えるだろう。
食べ物に罪はない、美味いは正義。疲弊した心身に活力を与える美味しい昼食。更に希少な男性の保護ということでこの時ばかりは邪魔されない。
1時間弱という短い時間だが、癒しは癒し。俺はこの瞬間を全力で堪能するのだ。
と言うわけで俺の唯一の癒しの場である屋上にて、俺は弁当箱を広げる。
『それにしても本当に信じられないよ、ますたぁが言う男女公平の前世なんて』
「社会が悪いなんてほざいてたけど、この世界体感したらいかに生易しいか理解したわ」

クリューヌは俺に取り付いていると言うこともあり、当然記憶も筒抜け、その結果俺が前世持ちというのは既に露呈している。
因みに何故この世界に男性が少ないか、という解答は未だ無い。
俺も貞操の危機を感じできるだけ調べた。戦争の影響や遺伝子の影響など様々な仮説が挙げられるが、これと言ったものはなく、むしろ年々と男性の出生率が減少しているとのこと。
過去の偉人も殆ど女性というギャルゲー仕様。それが原因なのか、男は女に護られるべきという風潮が現在も引き継がれており、もはや男性は家の堀から外界を知らないという箱入り息子状態。
前世を持っている俺から言わせてもらうと、もうこれわけわかんねぇな？
ただ人間どんな過酷な環境にいようと長い年月をかけて適応すれば、やがて慣れる。俺も例外では無い。むしろ一度死んだ身なので色々と吹っ切れた。
というか普通に暮らしているだけだというのにお金が入ってくる生活だぜ、楽しまなきゃ損だろ！
と、楽観的な事をほざいているが、その過程ではかなり苦労した。何が一番つらいかって、生身の男性との交流が無さすぎる。
この学園だってそうだ。２年の松田と元浜は「お兄様を腐女子の的にするなんて恐れ多い事出来ません！」と一蹴。お前らもっと欲に従えよ、地味×地味で妄想捗る奴なんていないだろ……多分。因みに俺をお兄様と呼ぶ一部が彼らだ。お兄様同じく２年の木場、イケメン死すべし（ブーメラン）。匙、生徒会長からの求愛にゲンナリしている模様。
以上、この学園高等部に在籍する男性全員でした。

……分かってる、明らかに１人足りないって。
この世界の主人公とも呼べる存在が抜けてるってことは重々承知している。でも仕方ないのだ。
俺は虚ろな目でフェンス越しに校庭を見下ろした。するとほら、す

ぐ見つけることができた。
「――――――ウェヒヒヒヒ！」
「きゃっ⁉？　ちょっとぉ、止めなさいってば、兵藤！」
ほらやってた、無防備な二代お姉様の片割れであるリアス・グレモリーの背中からその豊満な胸を鷲掴みする1人の女子が。
お分かりいただけただろうか。女同士の縺れにて呼ばれた『兵藤』という名前が。特筆するべき点は、男性なら一瞬で社会的信用を失う行動を当たり前のようにやり、被害者であるはずの女性も友達のイタズラ感覚で流しているのだ。
始めに言っておくが、この学園高等部に兵藤という名字は1人しかいない。

そう、この世界の我らが主人公様は見た目だけＴＳ化した『兵藤一美』という変態女子なのだ。

希少だからって、調子には乗らない。

さてさて、原作主人公がＴＳしているのはこれ如何に？
下校の路地で「ハァ」と溜息をつく。
そもそも『兵藤一誠』の純粋な変態性が物語を進めてきたのだ。
始まりは天野夕麻――――――――もといレイナーレという堕天使とのデートだ。
当然デートというのは異性同士が行う行為であり、同性同士が行う行為では無い。いや、愛し方は人それぞれだから明言できないが。
それとも違うアプローチで兵藤一美を殺しにかかるのだろうか？
……やめやめ、殺されるのが前提なんて話は物騒だ。
そもそも自分から深く踏み込まなければ良いんだ。この体質上どうせ向こう側から来るだろうが、その時はその時。それまでは平穏に暮らせば良いんだ（願望）。
『そうそう、何事も平和が一番だよね～』
同情の声を上げるクリューヌも、何かしら大変な過去を持つらしい。ドラゴンであっても性別は男性、だから色んな厄介ごとに巻き込まれたのだとか。
やっぱり持つべきものは友だ、そうしみじみしていると、向こうの商店街から何やら喧騒な声が聞こえてきた。
出店のたい焼きや、あそこは夕方５時から焼き上げるから評判が良いんだ。ほんの１時間ほどで売り切れるんだよ、持ち手の紙の上からでもホカホカしているんだよな。中のクリームやあんこもとても濃厚なんだよ。
ってそうじゃない、あそこから聞こえてくるんだよ。
『うへぁ、あれだね、男性だからってワガママ働いているようだね』
……。
「……あの、私が並んでいたのですけれども」
「君、メンズファーストって言葉知ってる？　知らないならこれを機に調べれば良いよ」

どうやら割り込みのようだ、しかもこの世界の特徴を突いた嫌なタイプの。いるよね、そうやって権力を傘にする人種。もちろん俺はそんな事しない。

まぁいくら俺が嘆いたって無くなるはずもない。関わるだけ無駄だ。

「……いや、だからそこは」

「あぁもうめんどくさいな。もういいよ、警察呼ぶから」

……関わるだけ無駄だ。

「男性である私に楯突くのが悪いんだよ？　その制服と背丈を見るに駒王学園の中等部かな？　まぁせいぜい男性に逆らったっていうレッテルを貼られて社会の波に呑まれれば良いよ」

……ダメだ、やっぱりムカつく。

そっぽを向いた足を直し、その男性の元に向かう。今まさに携帯を操作しているその手を握り潰さないよう優しく握りしめた。

「イデデデデッ⁉？　な、なんだね貴様は！」

「お前と同じ男性様ですが何か？」

「き、貴様！　こんな事をしてタダで済むと――――――」

「お前のその男性と女性の価値を突いたやり口、なるほど確かにおまえの悪事は男性の希少価値という盾に守られるんだろう。

――――――じゃあ男性同士ならどうなると思う？」

そこで男はようやく気づいたのだろうか、周りから向けられる様々な侮蔑の視線に。

この状況を作り出せたのなら後は容易い、相手が振り解けるよう力を弱めれば――――――。

「お、覚えていろ！」

うわぁ、見事に小物臭いセリフを吐きながら去って行ったなぁ。

『ますたぁ……』

分かってる、何で突っ込んだのかって。けれど許せないんだ、同じ男性としてああいうのは。

純粋にこの世界に生まれ落ちていればこういう正義感も湧いてこないのだろう。やっぱり前世持ちだから、周りの男性と比べて浮くん

だろうな。
私は逃げるようにその場から歩き去った。

「……先輩」

▼

結局、帰り道の公園で静かに盛大に項垂れる事になった。
恥ずかしい、ただただ恥ずかしい。
何だよあの臭いセリフ。あの男性を小物臭いとか言ったが、俺だってそうじゃん。
『まぁまぁ、ますたぁは良い事をしたんだし、別に落ち込む必要は――――』
「お前は分かっていない。あくまで前世基準だが、こんな事をした翌日には学園中に広まるんだぞ！　臭いセリフを吐いた奴ってな！」
善悪問わず、目立った行動をすればそれだけ周りは噂する。前世では有ったぞ、女子と会話しただけなのに付き合っているなんて噂が流れたのは。
タダでさえ周りからヒソヒソ話をされているのだ、これ以上ネタを提供してどうする⁉？
「最近、ストレスなのか知らないが、白髪ならぬ青髪が生えたきたんだ。はは、奇遇だな、お前の色と同じだよ……」
『……へぇ、もうその段階まで来ちゃったんだ』
何やらボソッと呟いたようだが、きっと慰めてくれたんだろう。やっぱり生涯の友はお前しかいない。
この世の恨み言を呟くかのように呪怨をブツブツと呟く。そんな私に声を掛けるものが居た。
「……あの、田中先輩」
「大体何でだよ、たかが一言会話したぐらいで――――――ってん？」

声を掛ける方に顔を向ける。するとどうだろうか、出た感想は何故貴方が？　である。
「……確か君は――――――搭城小猫、だよね？」
「はい。嬉しいです、私の名前を先輩が覚えてくれていて」
搭城小猫、リアス・グレモリーの眷属であり〝戦車〟の階級を持つ彼女は、その華奢で小柄な外見からはそぐわぬ怪力で場を荒らしていくパワータイプ。
容姿も猫と付くだけ有って、無口で感情を表に出さないが、一度デレればそれはそれは可愛すぎる少女である。
そんな原作キャラが、一体どうして？
「先程は私を助けてくれてありがとうございました」
そう言ってペコリと可愛らしいお辞儀をする小猫。
はて、先程は助けてくれて？　……背丈、中学生――――――あ。
「そうか、怒りで周りが見えてなかったが、君だったんだ」
そう言うと、肯定の頷きが為された。
「……それで、一体どうしたんだい？」
「そ、そのですね、お礼と言ってはアレなのですが……これ、あげます」
そう言って差し出してくれたのはたい焼き。持ち手の紙のロゴを見るに、先程のたい焼き屋ので間違いない。
ちょうど良かった、色々あったからお腹が空いていたんだよ。
「ありがとう、搭城さん」
「――――――ッ！　わ、私はこれで」
グウウウウウウウウッ！
「「……」」
今の音、発生源は私ではない。そしてこの公園には私と彼女の２人しかいない。もう分かるだろう、この音の発生源と正体が。
「一緒に、食べるかい？」
「……ひゃい／／／」
赤面しちゃって、かーわいー！

▼
田中太郎
駒王学園にてその名を知らない者は居ない。
希少な男性でありながら女性に寛容。それだけでも珍しいと言うのに、成績も良く運動神経も抜群。まさにラノベの世界から出てきたヒロインと言うのが駒王学園に在籍する女性全員の評価だ。
悪魔である搭城小猫もその1人である。
壮絶な過去を持つ彼女はとにかく愛情に飢えていた。両親はすぐに死去し、唯一の肉親である姉も失踪、そんな最中に出会った慈愛のリアス・グレモリーには感謝しかない。
だが、それでも満たせない愛情と言うものはある。
彼女も1人の女性、いずれ結婚して子供を為し、生涯仲睦まじく暮らしたいという願望が少なからずあった。
そんな最中に現れた白馬の王子。
彼女の所属しているオカルト研究部にも1人居るが、彼は事情がありカウントしていない。
とにかく、夢を見るのも仕方がなかった。来るはずもない未来を思い描き、1人思い慰めた夜も少なからずある。
そんな先輩が、今まさに自分と2人きりである。
「……」
会話もなく一心不乱にたい焼きに食らいついているように見えるが、小猫の内心はかなりヒヤヒヤしていた。
(先輩は、私のことをどう思っているのでしょうか……?)
控えめに言っても、自身のこの容姿はかなりよろしくないと評価していた。
この世で「ボンッキュッボンッ!」という評価の仕方が有るが、それに倣って自身を表現すると「キュッキュッキュッ!」である。
主人のリアス、女王である姫島、そして姉である黒歌。身近に魅力的な身体を持つ者がいる彼女はそれはそれはコンプレックスに感じていた。

だから内心諦めていた。この機会があっただけでも幸運、でももう少しだけ踏み込んでみたいな、と思うぐらいには。
「……先輩は、どうしてそんなに寛容なのでしょうか」
ふと、そう呟いた。
この世は男尊女卑、その様な環境で生まれた男性は当然傲慢になるし、その結果が先程の出来事だ。
にも関わらず先輩は勇敢に、それも私を助けてくれた。
まるで夢物語の英雄譚、そのお姫様の様な絶頂であった。
（どうして先輩は……）

「そうだな、確かに私は女性に対し嫌悪感は抱いていない」
ふと、先輩の口からそんな言葉が出てきた。
まさか、聞こえて――――――――!?
「ご、ごめんなさい先ぱ」
「というかむしろ、君みたいに可愛い後輩に話しかけられて嬉しいよ、俺は」
刹那、この世の時が止まった錯覚を受けた。
……え？　先輩は今何と言った？　可愛い、私を？
「可愛い、ですか？」
「あぁ、少なくとも今までで君ほど愛らしい存在は見たことがないな」
聞き間違いではない、嘘でもない。長年生きてきた勘が、そう言っている。
瞬間、極限まで頬が緩む。けれど白馬の王子様である先輩に見せまいと我慢する。
ずるい、憧れの存在にそんな事を言われたらもう我慢できなくなっちゃう。
不意に下腹部が熱くなる感覚を感じてしまう。
猫ショウという種族上、発情という生理的現象が存在する。周期的に現れるはずのそれだが、似たような感覚が今まさに自身を襲っている。

詰まる所、今まで抑制されてきた欲望が、甘い言葉で氾濫を起こそうとしているのだ。
（ダメ、ダメ！　我慢できないっ⁉？）
「ほら、今まさに君の口の横にクリームが付いているところだって実に可愛らしい」
クリームが付いてる？
食べるのに夢中で犯した小さな失敗、しかし今の彼女はそれを利用してこの疼きを解消せねばと頭をフルに働かせた。
「……先輩、そのクリームを取ってくれませんか？」
彼女が出した答えがそれだった。
かなり無理矢理ではあるが、先輩が私の顔を触る口実を作らせる事でこの疼きを少しでも解消しようという考えである。憧れの存在から触れられれば、それだけで満足できるはず。
分かっている、余りにも浅ましい考えだし失望されても文句が言えないのは。でもさっき発言で少なからず期待して――――――。
「――――――ッッ⁉!!」
刹那、口元に指で触れられた感覚がした。
そう、紛れも無い先輩の指だ。他の男性なら失望してサッサと去ってしまうだろうその行為を先輩は何の躊躇いもなく行ったのだ。
何という剛胆……違う、やっぱり先輩が言った通りなのだ。先輩は私のことを可愛いと本気で思って……。
結果から言うと、逆効果だった。沈静化するどころか余計に酷くなる。少しでも気を抜くと、今にでも子種を求めてしまうほどに……。
そんな堪え難い欲望と戦う中、不意に先輩の指を凝視した。今まさに私の口元に付いていたクリームを拭ったその指、クリームは未だ付着して――――――。
「……ん」
私は何の躊躇いもなく口に含んだ。
甘い、けれど先程まで感じていた甘さより遥かに甘い。
その甘さ（溜めた欲望を発散する）を逃さないように、先輩の指を舐め回す。猫ショウ特有の

ザラザラとした舌が先輩の指に絡ませる。
発情により思考が定まらない彼女はクリームを全て舐めとっても尚離さない。
クリームが目的では無く、その手垢を舐めとる奉仕こそが目的のように、丹念に丹念に先輩の指をただ味合う。
やがて味わい終えた彼女はその指を口から離す。唾液による糸が引くのが実に官能的であり――――――不意に目が醒めた。
（あれ、一体私は何をして――――――ッッッ!!!?）
今までの行為が全てフラッシュバックした。
自身の痴態、それを先輩に巻き込ませた後悔。全てがもう遅かった。
（いや……いやぁっ!?）
「――――――し、失礼しましゅ!!」
結局、私は逃げるように去ることしか出来なかった。
まさに泡沫の夢、きっと私は2度と先輩から気にかけられる事は無いだろう。それどころか、先輩が私に対する印象が最悪に……。
「にゃ、にゃあ……っ！」
恥ずかしい、死にたい。けれども背徳的だった思い出、それらが再び私の下腹部を熱くさせるのであった。

▼

ありのまま起こった事を話すぜ。
俺が小猫に言われるがままにクリームを拭ったら、その指を小猫が舐め回してくれた。
な……何を言っているかわからねーと思うが俺も分からない。
催眠術だとかそんなチャチなものじゃ断じてねえ、むしろＡＶも驚きのテクを味わったぜ……。
『……ますたぁ、それ表現として最悪――――――』
分かってんだよ全部！
だけど一生に一度有るか無いかのこの経験、思い出の中に保存せざ

るを得ないだろぉぉぉっ!?
「んほぉ……尊い、尊すぎるよ小猫ちゃん」
陰キャもビックリのこのセリフ。だけど今の状態じゃあ何でもキモくなってしまうのだ。
「……ねぇクリューヌ、この指お前の力でどうにか『出来ません』デスヨネー」

主要キャラは大抵何かしらの過去がある模様。

見るに耐えない惨状が生み出される。耳障りな虫の羽音が鳴り響く。不動を良しとして、痛みを与えてくる卑劣な存在を幾多も存在する。他者より遥かに凌駕した生命力と寿命を持つ僕に、生物の本質というものを嫌でもぶつけてくる。

僕は干渉をしていないし、されないよう秘境に鎮座している。それなのにどうしてお前たちの営みを僕に見せつける。

……うるさいなぁ。

虫どもの勝手な都合で邪魔されるのは、もうウンザリだ。

この醜悪な環境を改善しようと行動を起こすのは当然の行為である。そして、目の前の喧騒が起こる根本的な原因が両者に差があるからだと推測した。

他者より劣っているからこそ勝ろうとし、他者より後ろにいるからこそ前に進もうとする。そんな両者の差が原因だとするならば、その差を無くすことが問題の払拭に繋がるに違いない。

平すのだ。平さねばならない。全ての差を均等に平し、争うこと自体が無意味だという世界を作り上げなければならない。それは外面的なものだけではない、思考も、精神も、肉質も、骨格も、内臓も、全てだ。

そして僕は天に向かいその力を行使した。この浅はかで愚かな答えが、きっと全てを解決来てくれるだろうと信じて、後先の事など一片たりとも考えずに、ただひたすらに、その力を世界にへと向けたのだ。

『Ｂａｌａｎｃｅｒ!!』

「……」

何とも言えない複雑な心境で俺は目を覚ます。
周期的に見るクリューヌの過去は、たった一つの行動で世界の行く末が変化する天変地異と言っても過言ではない存在だと言うことを再認識される。そしてソレを憑依させている俺を、いつも不安にさせる。
そして最近はその周期も早まって来た。当初は一月に一回が、今では一週間に一回。またソレに比例して青髪への変色も際立ってくる。いよいよクリューヌに乗っ取られるのではないだろうか？
（まぁ、夢の続きを見ないだけでも十分か）
この夢はまだ終わりではない。ほんの少しだけ、クリューヌが天に吼えた後の続きがある。
けれどソレを朝から見るには余りにも悍ましい。何度も俺は見ているが、いくら経っても慣れない。いや、慣れたら負けだ。
クリューヌへの畏怖を再び覚え、ベッドから出る。
「んじゃ、今日も頑張りますか」
今日も一日、女性からの視姦に耐えるべく気を引き締めて台所に向かった。
一人暮らし故に培われた家事スキルをふんだんに駆使した朝食は毎日の楽しみ。それを糧に、今日も一日が始まる。
『……ｚｚＺ』
「本当にあの夢はコイツの過去を指しているのか……？」
締まりないかわいいイビキに、その様な疑問を持ってしまった俺であった。

▼

「……ストーカー？」
駒王学園、校門付近。マンモス校と言っても過言ではない当校は、どの時間帯に登校しても人だかりが激しい。しかし俺たち男性にはそれが適用されない。理由は単純、普通に登校するだけで周りの女子生徒がモーゼの十戒の様に割れるからだ。

毎度のことながら慣れないながらも、俺は松田と元浜と登校していた時にふと話題に出た言葉が「ストーカー」だった。
「俺たちの幼馴染の兵藤一美の事なんですが、どうも最近ストーカーに悩んでいるらしくて……」
「いや、もちろん嘘だと思う気持ちは分かるんですけど、それにしては必死に助けを求めている様で……」
俺はその相談に驚愕の意を隠せなかった。けれど驚いたのはストーカーではなく、その被害者が兵藤一美だという部分にだ。
恐らく、これは原作開始の合図だ。
もちろん完全に原作の通りとは行かない。何故なら原作キャラTSしているのだから。そしてそこから生まれた差異が彼女ではなくストーカーなのだろう。
「確か、兵藤が言うにはこの前――――――」
松田と元浜から言うに、兵藤が受けているストーカー被害は相当なものだ。自己満足なポエムが届く事はもちろん、誰にも見られていない筈の行動を読まれていたり、この前なんか烏の羽が届いたと言うではないか。
聞けば聞くほど悲惨なソレに思わず耳を塞ぎたい。
当然、助けたいという気持ちが湧いてくる、しかし俺が介入する事で起こる原作乖離も恐ろしい。
俺が思うに、原作とは辛うじて立っている石柱の様なものだ。
もしもあの時に仲間が裏切ったら、もしもあの時に主人公が挫折をしたら、もしも主人公が存在しなかったら、もしも、もしも、もしも――――――。
そんな幾多も存在する『ｉｆ』から見つけ出したハッピーエンドである唯一の終着点、それが原作だ。
それに俺が介入する事でｉｆに別れバッドエンドに直行してしまったら、俺は責任が取れない。
男女の価値観と主人公ＴＳの時点で原作の〝げ〟の字も無いが、これ以上過度な介入は危険だと判断した。

結果、俺からは関わらない。しかし向こう側から関わりを持ったらその都度対処する。
これが俺の本心と懸念事項の双方が納得する妥協案。それにこの体質だ、俺は逃げられない。逃げたところで修正力が働いて悲惨な目に遭うだけだ。
自分に納得をしながらふと横を教室を見れば、兵藤が友達に過剰なボディタッチに勤しんでいるのが目に入る。
まるでストーカー被害に遭っていないかの如く振る舞うソレに、俺は本心が懸念事項を少し上回った様に感じた。

▼

「昨日、田中先輩に運命を感じました」
「あのね小猫、その話――――――」
「でも、その後淫行に走ってしまいました……」
「だからね小猫、その話はもう――――――」
「だって、あんなに優しい言葉を掛けられたら誰でも発情しちゃうじゃないですか！　私はもう先輩と合わせる顔が……」
我らがオカルト研究部の部室にて、リアス・グレモリーは小猫の惚気話を苦笑しながら聞いていた。
小猫とは長年の付き合いであるから分かることなのだが、彼女は無口であまり感情を表に出さない。しかしそれがどうだ、今まで聞いたことのない饒舌な口調で同じ愚痴を既に１０回はこぼし、その表情は常に世界の終わりの様に絶望している。
「私だって……私だって女性なんです！　この学園に来て先輩を思わない日々は有りませんでした、授業中も常に思い続けていました！　先輩の事を思って慰めたことも――――――」
「それ以上は止めなさい、色々と尊厳が無くなるわよ」
リアスの忠告を最後に、小猫はテーブルにへと項垂れ沈黙した。
ようやく解放されたリアスは一時の安息につくも、すぐに思考を切り替える。
――――――田中太郎。

この学園で知らぬ者はいない。学生は裏で彼を白馬の王子様、ラノベの主人公、夢物語のヒーローなど、様々な呼び名で呼んでいる。
男尊女卑なこの世界において、何不自由ない生活を約束されている男性はその環境から傲慢になりがちだが、彼は違う。誰にでも分け隔てなく接し、会話をし、低俗なものでも差別をしない、まさに絶滅危惧種と言っても過言ではない『紳士』である。
しかしワザとなのか無知なのかは分からないが、その行動や言動一つ一つが我々女性を誘っている。リアス自身も胸がときめく瞬間を何度か味わい、その度に勘違いしそうになった。ハッキリ言って一日中お側にいるとしたら、翌日は愛液の洪水を起こすだろう。
そんなインキュバス染みた彼は人間であり、私たちは悪魔。容姿は酷似しているものの、種族はまるで違う双方。
故にいかに好意を持とうとも、純粋無垢な彼には裏の世界は知って欲しくないし、関わらせたくない。無理矢理転生させるなど以ての外だ。
(それでも、もし私が婚約者がいなければ狙っていたかしら……？)
リアスのその笑みは、まさに勝者の余裕そのものであった。しかしその笑みもすぐに途切れる。
(さて、この件はどうするべきかしら……)
魔王の妹と言う事もあり、いずれは大衆を導く立場に着く彼女は手始めに駒王町を管理、同時に人間界への進学の条件でもあった。
管理者という立場上、無法者は厳しく取り締まるのが普通であり、義務である。しかしその無法者もただで捕まるわけでもなく、狡猾に隠れたり抵抗を続ける。
そしてリアスが悩んでいるのは前者、狡猾に隠れ続け被害を出し続けている堕天使の存在であった。
(被害者は全員男性、共通しているのが顔の損傷が激しい事。現段階では悪魔技術で治療し、記憶改竄も施したけど、いずれ限界は来る。早く解決しないとこの町から男性が消えてしまうわ！)
いかに不慮の事故として処理したとしても、傷を負ったという事実

までは消せない。それが続くことで貴重な男性が駒王町を出て行くというのは重大な損害でしかない。
そしてもう一つ、この法則性で行くなら我が駒王学園の王子である田中太郎も被害を被る可能性が高いのだ。
（それだけは阻止しなければならないわね……）
これ以上被害を出さまいと、強く決心するリアス。しかし現状相手が上手であり、炙り出さないのも事実であった。
「私の下僕もそうだけど、生徒会にも救助要請を出すしか無いわね……。とにかく男性を監視して、捜査網を拡大しなきゃ……。ええっと、田中君には誰が――――――」

「――――――私がやります」
「……へ？」
「私が田中先輩を華麗に守って、昨日の失態を上書きするんです。そして華麗に守った後、田中先輩はこう言うのです……『あぁ、俺には小猫しかいないよ、是非結婚してくれ！』と。あぁダメです先輩、悪魔と人間という禁断の恋が――――――」
……やる気はともかく、このキャラ崩壊は田中太郎の魅力がなせる技なのか。小猫の護衛兼監視任務に一抹の不安しか感じないリアスであった。

▼

帰路。俺は通過道である公園で一人佇んでいた。
別に何の変哲もないただの公園、いつもなら思うところも無く素通りするのだが、先日小猫と逢った所為からか、ここが原作の始まりという事を実感していた。
確かこの場所で正史の兵藤が殺害され、リアスの手により蘇生、悪魔へと転生する。そう言った意味で此処は聖地。不謹慎だが、初めて

きた時は感慨深い何かを感じ取った。
「……ん？」
少し長居してしまったと思い、すぐに公園から出ようと足を踏み出した瞬間だった。誰かが駆ける音が聞こえ背後振り返ると、件の兵藤が走っているのが見えたのは。
「兵藤……？」
「た、田中先輩!?」
兵藤一美は俺の存在に気付き、安堵の表情を見せる。
しかしその前の表情はダイエットの為のランニングだとか、見たいアニメに出遅れそうだとかそんな生易しいものではない。
まるで何かから逃げてきたかの様だ。
（……ストーカーか？）
今朝松田と元浜に話を聞いていた俺は、その推測を下すのに時間は掛からなかった。
今さっきまで兵藤はストーカーに付け回されていたのだろうか。だとすれば、俺はこの体質に心の中で苦笑いを零す。
『いいのますたぁ、助けなくて。僕の力が有ればチョチョイのチョイだよ？』
いや、まだ確定では無い。もしかしたら度重なる変態行為に痺れを切らした被害者が追いかけ回しているだけかも知れない。
俺はありきたりな言葉で兵藤に挨拶を送った。
「何か有ったか分からないが、走って転ばない様気を付けてね」
「は、はい……」
あっちゃあ、これは確定かな？
微かに見えた兵藤の表情に確信しつつも、早々に兵藤は公園から立ち去ろうとして――――
「ふぎゅっ!?」
――――兵藤が、公園から出られなかった。
見間違えで無ければ、兵藤は今、公園の外に出るのを拒まれたかの様に公園の内側にへと弾け飛ばされた。

「兵藤、大丈夫か!?」
「痛た……。な、何か分からないんですけど、壁にぶつかった感触がして……」
壁？　何の話をしている、そんなの普通に考えて有り得ないじゃないか。
そう思いながらも公園の出口を見て、俺はハッとした。

薄いベール状の何かが、公園を覆うように展開されている。まるで「逃がさない」と言わんばかりの意志がヒシヒシと伝わってくるそれは、すぐに結界と気付いた。
『……マスター、警戒して』
普段の「ますたぁ」呼びから一転、クリューヌの真剣味が伺える。それもそうだ。この結界は人避けに加えて結界内の存在を閉じ込める術式が有る。俺もクリューヌに憑依されてから裏世界について勉強したから分かる。取り敢えず、ただの人間では絶対に脱出出来ない代物だ。
そして現在、この公園には俺と兵藤の二人しか居ない。少なくとも先に来た俺が入る時、俺もクリューヌも何も反応しなかったから、その時点ではこの結界は貼られていなかった。ならば必然的に兵藤が来た時点で貼られたと見るべきであり、加害者の目的に兵藤が関係しているという推測も容易に立てられる。
そう自覚するともう一つだけ知覚できるものが有った。俺だって神器（セイドリック・ギア）を持つものだ、当然身の安全を守る為に鍛錬はする。
だから分かるのだ、背後から刺すドス黒いギラギラとした殺気が。
「はぁ……」
俺はふと首を傾げる。
刹那、首のあった場所に何かが通り抜けた。
ズドォンッ!!
「……へ？」
兵藤が間抜けた声をするのも仕方ない。たった今、その飛来物が兵藤の背後の木々を消しとばしたのだから。

「なんだとっ!?　僕の槍を避けるなんて!?」
飛来物を俺に打ち込んだ加害者と思わしき声の方へと向く。そこには烏の羽を生やした男――――――――堕天使がいた。
容姿は中の上と言ったところでだろうか、化粧や服装込みで。けれど化粧や服装に手間暇かけている分、本気でモテたいという意志は伝わってきた。ただ、そんな顔も驚愕の表情で崩れかけているが。
「あぁ、貴方は「うるさい！　話しかけるな下等生物が！」……」
なんだこいつ。
理不尽な罵倒に青筋が立ち始める。が、ふと胸部に意図しない振動が起こる。何かと思って見れば、恐怖のあまり震えている兵藤が、俺の胸にしがみ付いていた。
そしてそんな兵藤に気が付いたのか、堕天使は先程とは打って変わって甘い言葉で話しかけてきた。
「あぁ……お迎えに上がりましたよ、婚約者(フィアンセ)よ」
エセ臭いフランス語に寒気を感じながらも、そのフランス語の部分の意味に唖然とする。
……こんやくしゃ？
「……兵藤？」
「違います！　私だって今初めてこの人の顔を見ましたよ！」
確認を取るが違うと断言される。
なんだ、狂言か。
「そんな、我が婚約者(フィアンセ)よ。私の愛の言葉をあんなにも受け止めてくれたというのに！」
「受け止めたって……。もしかしてあのラブレターの事を指しているの？　……じゃあハッキリ言わせて貰うけどね、あんなの寒すぎて氷河期が再来したのかと思ったよ！」
「なっ!?」
恐怖を怒りで誤魔化したのだろうか、ブチ切れた兵藤はストーカーの狂言を次々と論破していく。そしてその度にストーカーの顔が崩れるというメシウマ光景。
俺があの立場なら二度と立ち直れないね、なんて緊張感のない感想

を持つ。
やがて俺を挟んだ口論は終わりを迎えたのか、堕天使が言葉を震わせながら俺を標的にし始めた。
「……貴様だな」
「……ん？」
「貴様が我が婚約者（フィアンセ）を誑かし、至高なる私を貶めようとしているのだな!!」
「……はぁ!?」
再来する理不尽に思わず声を上げる。
あまりにも酷い言われ様に反論しようとするが、それは堕天使が投合した数本の光の槍が許さなかった。
しかしソレに当たるわけにもいかず、兵藤を抱いたまま難なく避ける。
「貴様ぁ……この私を愚弄して！」
おぉおぉ、青筋が立ちまくって顔全体が皺寄せたみたいになってる。そしてその増幅する怒りは収まるのを知らないのか、殺意が光の槍に載せられ次々と投合される。
何というか、ここ数日でやたらと態度の悪い男と出会う。鯛焼き屋然り、現在然り。
そしてソレはこのご時世が生み出してしまうのだろう。希少な男性、チヤホヤされ、挫折や恐れを知らない、全てが自分を中心に回っているという短絡的思考。
そしてそれを無関係な人たちにぶつける。余りにも突然で、理不尽な仕打ちが。
……ムカつくな。
俺は何でコイツに命を狙われているんだ？
コレが仮に俺の因果応報なら納得できた。自分の蒔いた種、そこから生まれた何かを自分で受け止めるのは道理だからだ。
だが、コレはなんだ？　俺はたまたま兵藤の隣に居ただけだ。何故イキナリ命を狙われないといけないんだ？
光の槍を避け続ける中で、俺はある衝動が湧き上がってきた。

それはあの夢に見た、過去のクリューヌと近い衝動。理不尽な仕打ちに憤慨し、その元凶を取り除かんとする余りにも短絡的な衝動。その後の被害など考えない、無計画な衝動。

身体が興奮してくるのが分かる。

血流が早くなり、アドレナリンが体全体に染み渡る。

ストーカーが次に何をするのか、どんな方向に投げるのか、一手一足が鮮明に見える。

歯の隙間から溢れた荒い吐息はまるで『龍』の様なもの。

登校時の結論に従えば、これは紛う事なき向こう側からの接触。そして俺は巻き込まれた。

ここで抵抗しなければ千日手、もしくは死だ。

これはもうやるべき事が――――――決マッタンジャナイカ？

『冷静になってマスター！　それじゃあ夢の僕の様に――――――』

……それに、いい加減兵藤が目を回して放心し始めたからな。早く終わらせないとえらい羽目になっちゃうじゃないか。

「……きゅう（お目目グルグル～）」

ふと見下ろせば、そこには状況を飲み込めず、お目目グルグルな兵藤が為すがままに俺に抱き付いていた。

やった、思いがけない役得やん!?　おっほ、兵藤の豊満なお胸ムネムネが押し付けられて……。

『……あぁ、うん、その調子じゃあ大丈夫みたいだね』

大丈夫、俺、冷静。目の前の、こいつとは違う。

「くそ、くそくそクソォォォ――――――！」

さて、俺は未だ光の槍を投げ続けるストーカーに怒りを通り越して呆れの感情が湧き出てきた。

こうしてみると、俺が相手にしているのは自分の思い通りに行かな

くて癇癪を起こす赤子の様にも見えてくる。化粧や服装に気を使った大の大人（こども）……ブフッ！

さて、そんな赤子には躾として現実を見せなければならない訳だが……。

「いけるか、クリューヌ？」

『もっちろん！　むしろ待ってたよ～！』

上機嫌になったクリューヌの声とともに、俺は右手を掲げる。顕現するは淡い碧の滑らかな籠手、久方ぶりにシャバに出たかの様にクリューヌがはしゃいでいるのを感じた。

「なっ！　そ、それは――――神器（セイドリック・ギア）!?」

ご明察、だけど気付いた時にはもう遅い。

決して無敵ではない、けれど使い様によっては絶対に負けることのない俺の神器（クリューヌ）。

「じゃあ、行くぜ――――？」

俺の声に呼応するかの様に、籠手に埋め込まれた蒼の宝玉が光り輝くのと同時にソレは発せられた。

『Ｂａｌａｎｃｅｒ!!』